

穂肥診断&ウンカ防除情報について

令和元年8月7日
佐城農業指導者連絡協議会

○穂肥施用について(各品種共通事項)

- ・穂肥施用時(幼穂形成始期)は湛水し、その後の間断灌水では、地固めと根に空気を送るため落水期間を確実にとる。地が緩い場合は、落水期間をやや長めにとる。
また、台風接近時は湛水し、通過後間断かん水に戻す。
- ・いもち病が発生している圃場への穂肥施用は、発生を助長するため施用を控える。

1. 夢しなく穂肥施用について

- ・すでに穂肥施用時期をむかえている。

【平坦部での夢しなく穂肥診断基準】

幼穂形成始期の草丈	葉色		施用時期		穂肥施用量	
	群落	葉緑素計	出穂前	幼穂長	N成分 kg/10a	BB602 kg/10a
73cm以下	3.0以下	34以下	20~22日	1mm	2.0	12.5
	3.0~3.5	34~38	18~20日	2mm	1.5	9.4
	3.6以上	39以上	施用しない			
73~79cm	3.0~3.5	34~38	18~20日	2mm	1.0	6.3
	3.6以上	39以上	施用しない			
80cm以上	施用しない					

※草丈は、幼穂の伸長程度により幼穂形成期(1mm)を基点に、前後1日あたり1cm増減する。
※出穂前15日以降の穂肥は、玄米タンパク質含有率を上昇させるので施用しない。

2. ヒノヒカリ穂肥施用について

- ・まもなく、幼穂形成期となり、8月上旬頃に穂肥施用になるとされる。

【ヒノヒカリ穂肥診断基準】

幼穂形成始期の草丈	幼穂形成始期の葉色		施用時期		穂肥施用量	
	群落	葉緑素計	出穂前	幼穂長	N成分 kg/10a	BB602 kg/10a
80cm以下	3.0以下	34以下	20~24日	1~2mm	3.0	18.8
	3.0~3.3	35~38	18~20日	3~5mm	3.0	18.8
	3.5~3.8	39~40	16~18日	5~15mm	2.0	12.5
	3.8以上	41以上	—	15~30mm	1.0以下	6.3以下
80cm以上	3.0~3.3	35~38	18~20日	3~5mm	2.0	12.5
	3.5~3.8	39~40	16~18日	5~15mm	1.5	9.4
	3.8以上	41以上	—	15~30mm	1.0以下	6.3以下

※草丈は、幼穂の伸長程度により幼穂形成始期(幼穂1mm)を基点に前後1日あたり1cm増減する。
※お盆以降の穂肥は、玄米タンパク値を上昇させるので施用しない。

3. さがびより穂肥施用について

- ・「さがびより」では、**8月中旬頃**に穂肥施用になると思われる。
- ・近年、穂肥無施用による低収が明らかになっている（図参照）。きっちり穂肥を施用する。
- ・施用時期は幼穂長5～10mmが基準。
- ・止葉は伸び易い特性を持っており、伸びすぎると伏せて稔実が悪くなりやすい。
(穂肥 N 成分で 1kg 増える毎に止葉は 2.5cm 伸長する)

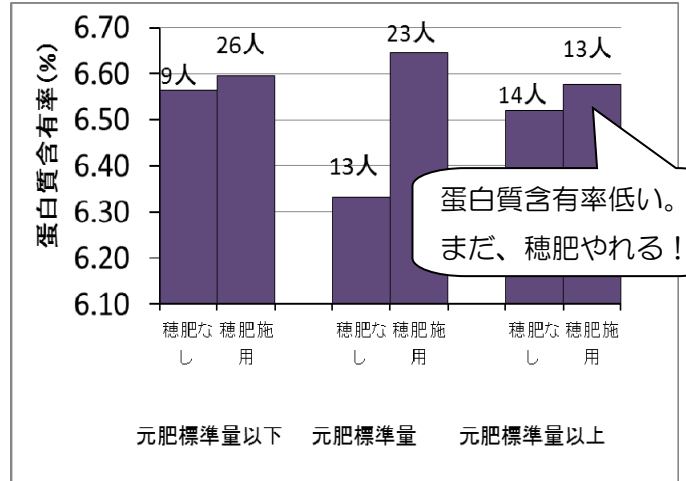
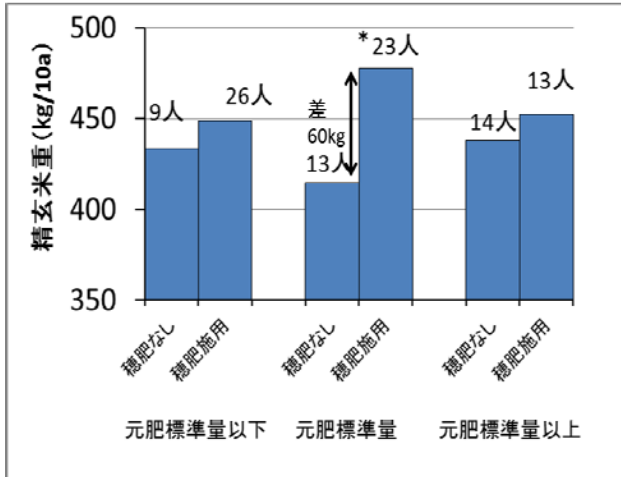


図 施肥体系と収量（さがびより）

★新基準 H29～★ さがびより診断基準

幼穂形成始期 (幼穂長1mm) の草丈	葉 色		施 用 時 期		穂肥施用量	
	群落	葉緑素計	出穂前	幼穂長	N成分 (kg/10a)	BB602 (kg/10a)
80cm以下	3.5以下	38以下	18～20日	5mm	2.5	15.6
	3.7	38～40	18日	10mm	2.0	12.5
	3.8	40～41	16日	15mm	1.0	6.3
	3.8以上	42以上	施用しない			
80cm以上	3.8以下	39以下	16～18日	10～15mm	1.5	9.4
	3.8以上	40以上	施用しない			

さがびより旧診断基準 (※中山間地域参考)

幼穂形成始期 (幼穂長1mm) の草丈	葉 色		施 用 時 期		穂肥施用量	
	群落	葉緑素計	出穂前	幼穂長	N成分 (kg/10a)	BB602 (kg/10a)
75cm以下	2.5以下	33以下	18～20日	5mm	2.5	15.6
	3.0	33～37	18日	10mm	2.0	12.5
	3.5	37～38	16日	15mm	1.0	6.3
	3.8以上	39以上	施用しない			
75～80cm	3.0以下	36以下	16～18日	10～15mm	1.5	9.4
	3.0以上	37以上	施用しない			
80cm以上	施用しない					

さがびよりの生育ステージと穂肥の施用時期のイメージ

	←--- 穂肥時期の目安 ---→											
出穂前日数	-25	-24	-23	-22	-21	-20	-19	-18	-17	-16	-15	出穂期
幼穂形成始期及び幼穂形成始期からの日数						4日後	6日後	1週間				
幼穂長		1mm	2mm	5mm	10mm	15mm	20mm					
標準的な草丈(cm)		72~75	草丈の指標は、1cm/2日減じて使用する									
備考						適期						
注1) 「 」印は、幼穂形成始期を示す												

4. ヒヨクモチ穂肥施用について

ヒヨクモチの穂肥施肥基準（分施タイプ）

	穂肥Ⅰ(kg/10a)	穂肥Ⅱ(kg/10a)	実肥(kg/10a)
施用時期の目安	8月15~18日頃 (幼穂形成始期幼穂長1ミリ頃)	8月24~28日 (穂肥Ⅰの10日後)	穂揃期 (9月10日~13日頃)
LPBB804	40	—	—
BB602	25	10	10

※全量元肥施用田（一発くん）においても穂肥Ⅰ～Ⅱの時期に SPAD で40を切る場合には、窒素成分で2kg/10a程度（BB602 10~20 kg/10a）施用する。

5. トビイロウンカ対策情報 8/1 現在の発生予想パターン

～注意報が出ています！圃場の発生状況を確認し防除計画を立てましょう～

- ・今年度は断続的なトビイロウンカ飛来が確認されている。ピラキサルト剤を導入している圃場であっても発生状況を確認する。
 - ・必ず各地域及び圃場ごとの発生状況を確認する。(各地域及び圃場ごとに発生量が異なるため)
 - ・防除の際は、湛水するとともに、株元まで薬剤が十分かかるよう、ていねいに散布する。
- ※最新の飛来状況については、農業技術防除センターのホームページから確認してください。
佐賀県庁 HP ホーム > 分類から探す > しごと・産業 > 農林水産業 > 営農支援情報・関連施設 > 病害虫データ > 病害虫発生予察情報

<http://www.pref.saga.lg.jp/kiji00322110/index.html>

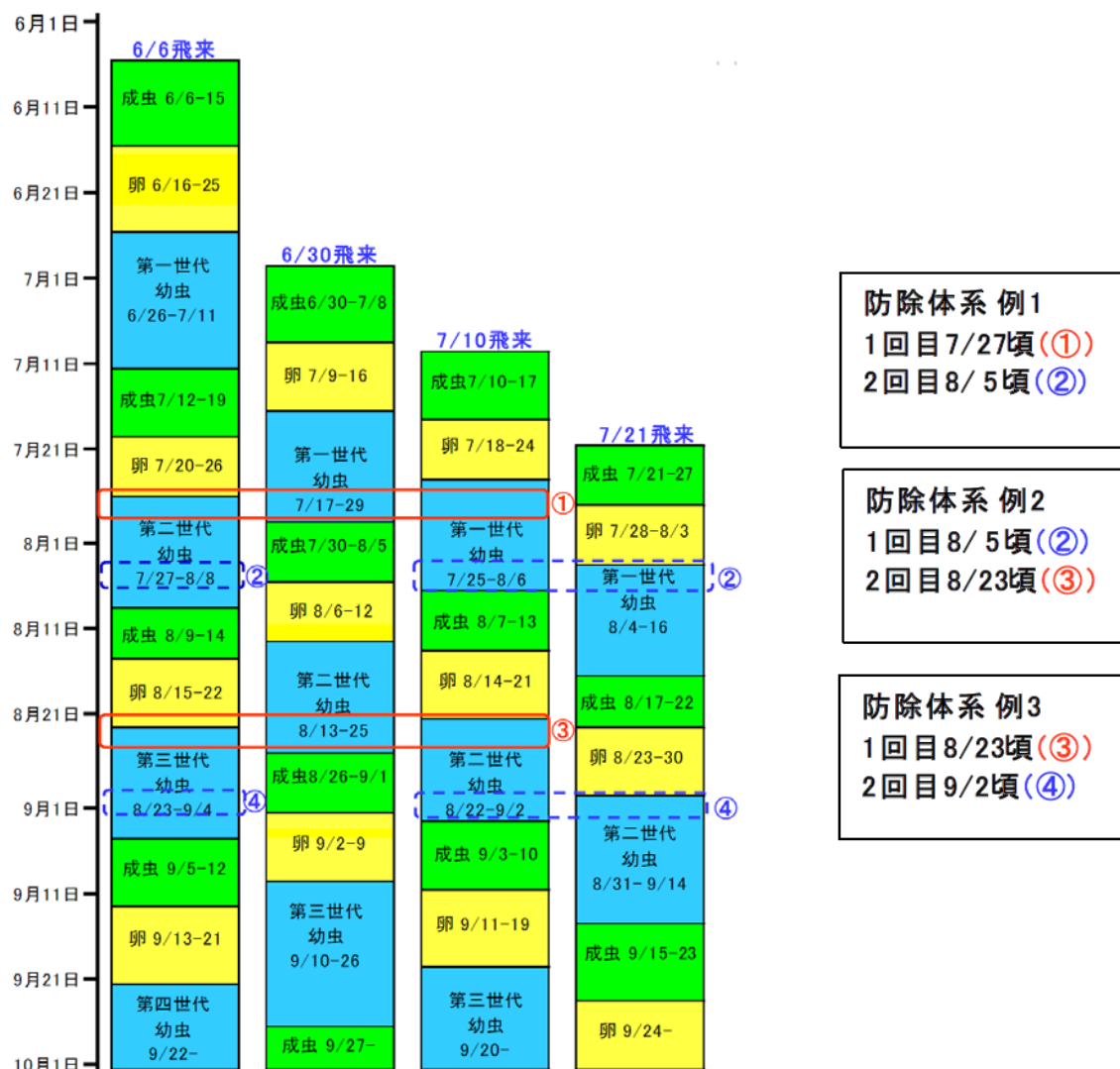


図2 トビイロウンカ各世代の発生予測(第5版、2019年8月1日作成)

1. 6月6～7日頃(図では6月6日)、6月30日頃、7月10～11日頃(図では7月10日)、7月21日頃に飛来したウンカを起点とし、有効積算温度と佐賀市川副町の気温データ(第4版では7月22日までは実測値で以降は平年値、第5版では7月31日までは実測値で以降は平年値)を基に作成した。その結果、第5版は第4版と比べ、各飛来虫の、その後の発生時期は約0～1日遅くなったが、全体としてほとんど変わらない。

2. 普通期水稻には、6月6日飛来虫は定着していないと考えられる。この例のように、各飛来波に対する防除の重要度は、田植え時期によって異なる。

3. 本虫に対しては、幼虫ふ化揃い期の防除効果が最も高い。しかし、本年は断続的に飛来がみられたことから、飛来波ごとの幼虫の出現時期は異なると予想される。複数の飛来波の幼虫を、より効率的に防除可能と考えられる時期として「6/6、6/30、7/10飛来波を対象とした場合を実線赤枠(①、③)」「6/6、7/10、7/21飛来波を対象とした場合を点線青枠(②、④)」で示した。さらに、全ての飛来波を対象とした場合の体系防除の例(1～3)を、本図の右側に示した。